

「ある単位制高校の一年」（第2回）

【学校という場の「公共性」】

ここでいう「公共性」とは、いわゆる公教育か私的教育かという視点ではなく、生徒自身が感じている「場」の公共性について述べることにする。

さて、本校がフレックス型単位制課程の開課程・入学式から約2ヶ月が経過した。大きなトラブルもなく、生徒は楽しそうに学校生活を送っている。毎日の校内巡視でも、生徒の多くは、なかなか熱心に学んでいるように映る。

全国の不登校児童生徒数はここ10年上昇する一方であるが、コロナ禍はその数をさらに増やす力をもっている。コロナ禍がメンタル禍という所以である。またコロナ禍は、家庭内における虐待を顕著に増加させている。家庭生活の不安定から、学校における人間関係のみに依存する児童生徒も増えていると考えられる。

不登校の出現率は中学生が圧倒的に多い（文部科学省,2020）。小学校から中学校への移行時における学校文化の急激な変化（中1プロブレム）はもちろん、思春期（小学校高学年～中学生）には、多くの場合、特定の児童生徒の影響のもと、強い同調圧力（peer pressure）に晒されることがほとんどと言ってよい。多くの場合、その力は、スクール・カーストを成立させ、これを強化する力となりやすい。

一般に同調圧力は、学校の指導がその発信源であれば、学校が主張する正義が強調されるが、もしも学校よりも強い影響力をもつ生徒集団によるスクール・カーストが成立していれば、その力が支配的となり、その生徒集団の考え方が正義となる。もちろん、その場における正義が生徒の発達上、望ましいものであればそれも一つの教育の姿であり、好事例は多数存在する。

しかしながら、極端な述べ方をすれば、その正義が「学習しないこと」だったり、「先生に従わないこと」であれば、忽ち学級崩壊となるであろう。そこまで極端でなくとも、生徒による同調圧力の強い状態は、それが受け入れられない生徒にとっては耐え難い圧力になる可能性がある。

そもそも、不登校状態にあった生徒の多くは学校に行きたくてたまらない。でも行けないのだ。特に真面目に学びたい生徒にとって、一部の影響力の強い生徒による「学習しないこと」や「先生に従わないこと」が正義となるような力がもしも働いていたならば、むしろ不登校状態であることが学習者という視点からは望ましく、当たり前の姿とも言える。学校という場が、「公共の場」ではなく、一部の生徒の「私的な居場所」にすぎない状態になっている場合、これが当てはまる。

これまで多くの市町村教育委員会が運営する適応指導教室や教育支援センター、フリースクールを訪問し、そこに通う多くの生徒と関わってきたが、彼らのほとんどは、驚くほど真面目で学ぶ意欲も高い。ひょっとすると学校不適応状態こそが望ましい姿なのではない

かと感じさせられることも少なくない。それくらい思春期の同調圧力が学校教育に与える影響が大きいということである。

本校フレックス型単位制には、中学生時代に不登校状態を経験した生徒が少なくない。不登校の背景は実に多様ではあるが、本校では上記のような状態を想定し、徹底して安心・安全な場づくりに努めている。

具体的には、① 学校は学ぶ場であり、学びたい生徒を徹底して守り抜くこと、学ぶことを阻害する行為は断じて許さないという強い姿勢を絶対的価値として最初に示すことであり、② 単位制であることから「自分で考え、正しく判断し、行動できる」自立した社会人であることを求めることの2点である。

それは結果として、学ぶことを大切にされた学校の姿勢を徹に示すことであると同時に、学校が安心・安全な学びの場であることを生徒に強く意識させ、結果として自立を促す。

完全選択制授業のフレックス型単位制のシステムは、科目ごとに生徒が入れ替わるため、固定的な人間関係だけに縛られることのない、言わば「公共の場」である。毎時の授業が固定されないことから、教育活動が「公共の場」となり、これが学校全体の安心・安全、そして学校への信頼につながるものである。

公共の場としての学校では、大人げない行動や非常識な行動は、恥ずかしい行為、カッコ悪い行為と見られることにもなる（これもある種の同調圧力ではあるが…）。また、固定クラスがないため、付き合いたい友人とは付き合いやすく、付き合いたくない友人と無理に付き合う必要はない。それは、一般的な大人の社会と同様である。学校の中にリアルな小社会を形成し、お互いに学びやすい環境をつくり合い、お互いの人生を幸せにするという公共の目的が、生徒たちの熱心な学習を支えていると考えられる。

【全日制課程生徒の在り方生き方指導】

前回述べたように、本校は今、全日制2・3年生とフレックス型単位制の1年次生が併存した状態にあり、現2年生は本校最後の全日制課程の生徒である。フレックス型への改編にあたり、全日制の生徒たちが疎外感を感じないように、自己存在感を高めるとともに、他者に向きがちな彼らの眼をしっかりと自己に向き合わせる事が必須の課題と位置付けた。

そこで、昨年度から全日制課程の生徒に課題を出し、その回答に対して、校長である私自ら全員にコメント・バックによる直接対話を継続している。本校全日制生徒2・3年生は200名弱であり、十分可能な量である。

そこで令和2年12月17日第二学期終業式式辞にて次のように述べた。

「今日はみなさんに年末年始の課題を与えます。ユーチューブの動画「18祭」「正解」(RADWIMPSと1000人の18歳、感動の歌声)

(<https://www.youtube.com/watch?v=xKjFYKWCDas>)を見て、①「思ったこと感じたこと」、②「ありたい自分」について簡単でよいので書いてください。学校帰りではなく、

家に帰って静かな環境で言葉をかみしめながら視聴し、新学期にその答えを提出してください。正解のある問いはもちろんたくさんあります。それもとても大切です。でも正解のない問いもある。一番は、あなたの人生です。年末年始、自分の人生の幸せと本気で向き合う時間にしてください。」このように、コロナ禍にあって他者に向けられがちな視点を自己に、そして未来に焦点化させようと考えた。

新学期に寄せられた回答の一部を紹介したい。

3年生Aさん：(思ったことと感じたこと)「明日が来るのは当たり前じゃないということを改めて思い知らされました。」 (ありたい自分、なりたい自分)「1日1日を大切にできる時間を大事にできるような人になりたいと思いました。」

校長コメント・バック：「明日が来るのは当たり前じゃない」と感じたあなたは、人生の価値について深く理解した人だと感じました。だからこそ、一日一日を大切に生きようとする、時間を大事にしようとするのだと思います。人生の価値を若い時に理解した人は、生き方が変わります。その姿を感じずにはいられませんでした。

3年生Bさん：(思ったことと感じたこと)「途中から泣きながら歌っている人が沢山いましたが、多分泣いている理由は皆少しずつ違って、色々な思いがあるんだなと思いました。」 (ありたい自分、なりたい自分)「自分は自分らしく、たまに間違っただけでもそれに気づけて正しい事が出来る優しい人でありたいしなりたいと思いました。」

校長コメント・バック：泣いている理由の違いに気づくあなたは、歌っている人の微妙な表情の違いや歌い方の違いを見取るだけでなく、その一人ひとりの背景に心を寄せたのだと思います。あなたの感性豊かさや相手意識の深さに敬服します。素晴らしいことです。自分らしくあること、自分で気づいて判断できる優しい人をめざすあなたの思い、自分と周囲の幸せへの思いは、あなたの愛情そのものだと思います。

どの生徒も他者意識をもちながら、自己に焦点化された視点で述べようとする姿が見られた。RADWIMPSの効果か深い自己開示がなされた回答ばかりであった。一人ひとり、その良さを見出しつつ、リフレーミングしながらコメント・バックすることで、自分が大切にされていることを自覚させるとともに、自分を大切しようとする意思を引きだそうと考えた。気のせいかもしれないが、コメント・バックの翌日から学校のあちこちから生徒の明るい声が聴こえるようになったと感じた。

そして3学期の終業式には、次のような課題を与えた。

「みなさんに「春休みの課題」を与えます。1点目の課題です。1年前、1年生は中学校卒

業、2年生は高校1年生の修了の頃。1年前の自分と、今の自分を比べて、成長できたこと、振り返って比べてみてください。2点目の課題です。今から1年後、1年生はもう3年生になる直前、2年生はもう卒業していますよね。自分の1年後の姿を想像してください。どんな3年生になりたいか、どんな大人になりたいか、「自分が1年後にどう成長していたいか」を書いてほしいと思います。

特に1点目の課題「1年前の自分と比べて成長できたところ」は、先生方や家の人、友達など、できるだけ多くの人にぜひ聴いてみてください。あなたが自分で気づかない成長に気づいてくれているかも知れません。本当のあなたの姿は、自分だけではわかりません。あなたの思う自分の姿、他人から見たあなたの姿、両方とも本当のあなたの姿そのものです。素直な心で耳を傾けてください。」これらはM.L.サビカスのキャリア構成カウンセリングの理論を応用したものである。

新学期4月に寄せられた回答の一部を紹介したい。

2年生Cさん：(1年前の自分と比べて成長できたところ) 我慢できるようになったと思います。(1年後にどう成長していきたいか) 自信をもって堂々夢に突き進んでいる自分になりたい。

校長コメント・バック：我慢できるようになったあなた、それは必要な我慢、大切な我慢だと感じているのだと思います。そう考えることこそが成長の証。我慢が我慢でなく、当たり前になり、自然な姿になれば我慢でもなくなるのかもしれない。それが自信となり、堂々と夢に突き進むあなたをつくりあげる一助となるのかもしれない。あなたの成長意欲は本物だと感じました。

2年生Dさん：(1年前の自分と比べて成長できたところ) 人見知りがすごく自分から話しかけるのが苦手だったから友達ができなかったけど今は話しかけることができるようになった。(1年後にどう成長していきたいか) 今よりももっと進んで自分から人と話せるようになっている自分でありたい。

校長コメント・バック：人見知りで話しかけることが苦手だったあなたは、昨年1年間で話しかけることができるようになったのですね。周囲のことに気を配り、周囲を大切に考えるあなただからこそ、話しかけることの大切さに気付けたのだと思います。周囲想いのあなた、周囲を大切に考えるあなたの周りの友達はとても幸せだと思います。その幸せをもたらすあなたは、もっと幸せになれると思います。

これらの目的は、①節目の教育力を最大化させることと、②先生方の生徒理解力を高めることと、カウンセリング力向上のためのモデリングとなることの2点である。

校長式辞は節目の大切な教育活動であり、その教育力を個別最適化するため、生徒一人ひとりが自分自身に焦点をあててこれを開示する機会を与えるとともに、丁寧にコメント・バックすることで、生徒一人ひとりが視野を拡げたり、自己理解を深めたりする一助になると考えた。また、生徒の発したキーワードをひろったり、発言のリフレーミングなどカウンセリング・スキルの一端を示すとともに、生徒の自己概念構成を促すことで、担任の先生方の意識向上に資することができるとも考えた。今後、同様の取り組みはフレックス型単位制に拡げる予定である。

全日制とフレックス型単位制の併存期間は始まったばかり、今後の展開はいかに。

【次回予告】

「時間割づくり」は「人生づくり」。フレックス型単位制ならではの「時間割づくり」はキャリア発達を促すアクセラレーター。本校のキャリア教育サイクルについて述べます。